

浅草寺所蔵「水月観音像」の復元研究

一月光の表現について一

金 慧印 (東京藝術大学大学院)

1. 作品概要

本研究の対象作品である浅草寺所蔵「水月観音像」(以下、浅草寺本)は、縦 141.6 × 横 61.6cm 一鋪の絹本着色一幅の作品である。

大きな緑色の舟形光背に包まれた水月観音は、蓮華に立って右足を踏み出し、善財童子に向かって歩むように描かれている。左手で緻密な文様の浄瓶、右手の第一指と第三指で柳の枝を軽く摘んでいる。着衣は、水月観音像の通例の僧祇支であるが、その中に描かれた亀甲紋は、布のしわに沿って形に変化がつけられていることが特徴である。白色の帯が、頭の後ろから体に沿って地面まで垂れ下がり、また無数の白色の線が交差したヴェールが、宝冠から足元まで掛かっている。背景には、水面に宝石や珊瑚などが散らされており、水月観音と善財童子の間には供養花が描かれている。

2. 研究目的

本研究は、浅草寺本における月光を感じさせる表現に着目し、そこにいかなる彩色方法が用いられているのかを実技的な見地から検証し、復元模写による実証を試みるものである。

3. 仮説及び検証

従来より浅草寺本は他の水月観音像にない特異性と芸術性の高さから特別な評価を得てきた。特に、緑色の大きな舟形光背と、立像水月観音の姿は他の坐像水月観音像とは異なる独特の図様であり、先行研究においてはこの特徴的な図様が論考の中心となってきた。

しかし、自身も描き手である筆者は、浅草寺本の魅力と特異性は、その独特な図様だけではなく、「月光」を感じさせる彩色技法にあると考えた。そもそも、水月観音像という名称からわかるように、「水」と「月」は画面上に視覚化されるべき造形要素であるが、直接的に月が描かれた作例はきわめて少ない。浅草寺本も月が描かれていない作品の一つである。ただし、管見の限り現在図様が確認できる 39 点の独尊の水月観音像のうち、「月」が間接的に表現されている作例がいくつかある。

その作例には水月観音が坐る岩や水面と接する地面の部分に金泥が多用され、水面に近いほど濃く、地面に向かうほど薄く彩色されるという共通点があった。筆者は、この金泥が、水面に反射する「月光」に照らされる情景を表そうとしたものであり、水月観音像において深い意味を持つ「月」を直接的に形として描くのではなく、水面が反射する光によって間接的に表現している

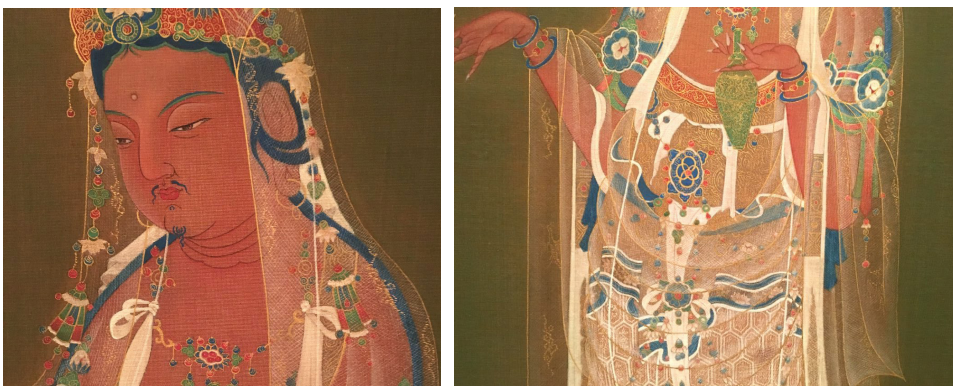
のではないかと考えた。

では、唯一の立像である浅草寺本における「月」はどこに表現されているのであろうか。具体的な図様として表現されていないとすれば、それは「月光」を感じさせる彩色表現によって実現されているのではないかと考えた。

ところで、浅草寺本には、他の水月観音像には表れてない3つの彩色の特徴が確認できた。それは、白色が多用されていること、画面の下部分に金泥が多用されていること、暗い背景に色の変化が見えることである。筆者は、この3つの彩色の特徴が月光を感じさせる視覚効果を与えていると考えた。そのため、これらの疑問と推測を出発点として、浅草寺本における「月光」を彩色技法の面から実技的に検証した。そして検証を通して解明した彩色技法を用いて、「月」を感じさせる想定復元模写を提示した。

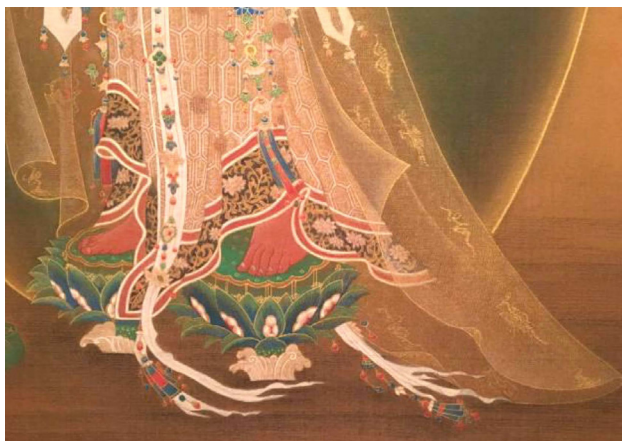
以下は、浅草寺本に見られる3つの彩色の特徴を検証するため行った想定復元模写の結果である。

ア. 水月観音の顔貌、裾やヴェールに白色彩色を多用することで、ハイライトのような効果につながり、暗褐色の背景の中に独尊の水月観音像が浮かび上がり、立体感がもたらされた [図1]。



[図1] 白色の多様によるハイライト効果 (左: 本尊の顔貌の部分、右: 裾やヴェールの部分)

イ. 画面の頂点から下端に行くにつれて金彩を徐々に増して施すことによって、画面の下方に至るほど水面から照り返された月光が広がっているように感じさせる効果が得られた [図2]。



[図2] 金彩表現による効果 (本尊の足元の部分)

ウ. CG を用いて彩色を終えた画像を単色の地色に乗せ、グラデーションが施された背景と比較した。その結果、地色にグラデーションがある方が、水月観音の在る空間および水面から反射する月光をより感じさせることがわかった [図3]。



[図3] グラデーション表現による効果 (左・中：単色の地色、右：グラデーションが施された地色)

4. まとめ

本研究では、浅草寺本について想定復元模写を通じた考察を行った。これにより、本作では、白色の多用によるハイライト、特殊に使われた金泥、背景に施されたグラデーションという彩色技法によって、月夜の闇と「月光」をより感じさせる表現がなされていたと結論付けた。そして、浅草寺本の特異性は時代に共通する表現を越え、特定の絵師の創意によって生み出されたものであったと考える。浅草寺本が数百年の時を経て私たちの情感に訴えるのは、浅草寺本に絵師の個性が現れているからなのであろう。その絵師の名は、浅草寺本の銘記によって知られるところであるが、脇侍の水月観音を抜き出し独尊像として緑色の舟形光背を負わせ、通例にない写実性をもった彩色技法を絵師に駆使させた背景には、どのような発願者がいたのであろうか。本研究が行った彩色技法の解明が、浅草寺本ひいては高麗仏画研究の進展に寄与していくことを願う。



[図 4] 浅草寺所蔵「水月観音像」の想定復元模写